



REGGIO CALABRIA 198
FROM THIS
THIS DANGEROUS BEGINNING
REGGIO CALABRIA...

The Year of Three

Ferdinando Frega

GILLETTE：3の年 — 第2幕

人生にはあまりに多くのことが、いっぺんに起こる。だから忘れるのは自然なことだ—感情は記憶されない。その瞬間に生きられるだけだ。記憶に残るのは事実である。

あの5月29日の朝、私はレッジョ・カラブリア商工会議所の2階に姿を見せた。28歳だった。ひとりの女性が出迎え、会頭の秘書だと名乗り、入口は下の階ですと言った—たぶん迷われたのでしょうか、と。

いえ、私は商業代理人委員会の評議員として、ここに召集されたのです。これが電報です。

拝見します。フレーガ・フェルディナンド殿、5月29日9時30分に召集—でも、何かの間違いでしょう。別のフレーガさんのことではないかしら。お父様とか。あなたは若すぎます。これは手違いに決まっています。身分証明書をお願いします。

彼女は確認し、10分後に会頭その人を連れて戻ってきた。会頭は私を温かく迎えた—イタリアの代理人委員会で最年少の評議員を。

秘書は、まだ死んでいない手負いのバイソンを見るように私を見た。どこから先に仕留めたものか決めかねて。気を取り直すと、こう言った。フレーガ様、失礼ですが—実際のところ、何をなさっている方なのですか。

「様」とはありがたいのですが、私は中学を出ただけで、卒業資格もありません。カミソリの替刃を売っています—小売です。まだ卸ですらありません。おまえにはまだ早いと言われまして。

では、なぜここに任命されたのです。それも、誰に。

私も同じことを自問しました。2000年前に一緒に働いていた同僚が、こういういたずらを私に仕掛けるのが好きでして。理由は決して訊かないことにしていま

す。

待ってください—あなたはConfcommercio Italiaの全国委員会にも入っていますね。それも同じところから来ていますね。それで、Gilletteの替刃しか売っていないのですか。

ええ、奥様。小売だけです。もっとも、いつか私が自分でつくって卸で売ようになったら、それももっと広い地域で、と想像してみてください。そのときはどうなるでしょうね。

2000年前のご同僚に訊いてみましょうか。

あはははははは。

会合が始まる。私たちは12人。会長が指名され、書記が、評議員が、会計が指名される—そして役がひとつ残り、全員が私を見ている。広報担当だ。

私は辞退する。そういうのは昔からまるで駄目だった。

フェルディナンド